広島女学院大学国際教養学部紀要　第１号
BULLENTIN OF FACULTY OF LIBERAL ARTS 1
HIROSHIMA JOGAKUIN UNIVERSITY

マタイによる福音書21章14節に関する一考察

澤　村　雅　史

Does Matthean Jesus cleanse the Temple to invite handicapped people?
－A Study about an Exegesis of Matthew 21:14

SAWAMURA Masashi

１．はじめに

共観福音書はいずれも，イエスのエルサレム入城に続く出来事として，いわゆる「宮清め」を報告している。ヨハネ福音書は，イエスの宣教の最初期段階に位置づけるという点で共観福音書とは異なるものの，やはりこの出来事を過越祭のエルサレムでの出来事として描いている。

それぞれの描き方に特徴がある中で，マタイ21：14のイエスが境内で「目の見えない人々と，足の不自由な人々」（τυφλοὶ καὶ χωλοὶ）を癒したという記述はマタイ独自のものである。本研究においてはこの記述がペリコーペ内およびマタイ福音書全体において持つ意義を検討したい。

２．テキスト観察

前後のペリコーペも含めた物語の枠について，ここではマタイとマルコ間の異同を比較する。

両者において，エルサレムへの旅開始および受難復活予告（マルコ10：32ff.／マタイ20：17ff.），ヤコブとヨハネの（マタイではその母の）願い（マルコ10：35ff.／マタイ20：20ff.），盲人の癒し（マルコ10：46ff.／マタイ20：29ff.），エルサレム入城（マルコ11：1ff.／マタイ21：1ff.）までの枠組みは一致している。異なるのは，マルコはいちじくの木のエピソードで神殿でのエピソードをはさむが，マタイは神殿での出来事のあとにいちじくの木のエピソードを置くということである。また，マルコはいわゆる「宮清め」をエルサレム入城の翌日，いったんベタニアに出たあとでエルサレムに戻った際の出来事として記すが，マタイはエルサレム入城のすぐ後に起こったように印象付けている。

次に，当該ペリコーペ（マタイ21：12～17）とマルコテキスト（マルコ11：15～19）を比較する。

マタイ21：14，15節の大半・16節はマタイによる付加。17節はマルコ11：11，19に依拠しつつ，前述のように時系列を整理するマタイの編集句として作用している[1]。

エピソードの結末は，マルコにおいては祭司長たちや律法学者がイエスをどのように殺そうかと謀る点で受難物語へと直結していくが，マタイにおいては単に彼らが腹を立てるというように緩和されている。

一方，15節「ダビデの子にホサナ」は９節において報告されるエルサレム入城の歓呼の声の想起であり，この歓呼の声のリフレインに，神殿での追い出し，および，目の見えない人たちや足の不自由な人たちの癒しという二つの出来事が囲まれている。

その９節にはマルコ11：10「我らの父ダビデの来るべき国に」からの改変によって，マタイが好む「ダビデの子」称号が導入されている。

そしてこの称号はすでにマタイ21：29～34の二人の盲人の癒しのエピソードにおいて導入されており，エルサレ

ム入城の前後に「ダビデの子」という呼びかけ[2]が繰り返される構成となっている。

20章30節・31節　「主よ，ダビデの子よ」
エルサレム入城
21章　9節　「ダビデの子にホサナ」
12－13節　神殿での追い出し
14節　目の見えない人・足の不自由な人の癒し
15節　「ダビデの子にホサナ」

図１　エルサレム入城と「ダビデの子」称号

このように，エルサレム入城という出来事の報告において，「ダビデの子」という称号をマタイは集中的に用いている。

３．「ダビデの子」について

次に，マタイ福音書および共観福音書における「ダビデの子」用例について分析してみたい。

マタイ福音書には，ダビデへの言及が15回と，新約聖書中で最も多くみられる（マタイの他には，ルカに12回，使徒言行録に10回，マルコに７回，ロマ書に３回，黙示録に３回，ヘブル書に２回，ヨハネに１回，Ⅱテモテに１回である）。

中でも，「ダビデの子」という呼称は圧倒的にマタイに多く，11回を数えるが（１：１，１：20，９：27，12：23，15：22，20：30，20：31，21：９，21：15，22：42，22：45），うちヨセフに対する天使の呼びかけである１：20を除く10箇所は，イエスに関連する用例である。なかでも盲人の癒し（マルコ10：47，48⇒マタイ20：30，31およびルカ18：38，39並行）と，ダビデの子論争（マルコ12：35，37⇒マタイ22：42，45）を除く６箇所はマタイに固有の用例である。とくに，このうち３箇所（マタイ９：27，12：23，15：22）は奇跡的治癒および悪霊追い出しに関連してこの称号が用いられている。また，後述のように，21：９，21：15も，21：14の存在によって治癒奇跡と結びつけられている。

表１　共観福音書における「ダビデの子」称号

マタイ	マルコ	ルカ
１：１　系図	―――	―――
〔１：20　ヨセフへの呼びかけ〕	―――	―――
☆９：27　二人の盲人の癒し	―――	―――
☆12：23　ベルゼブル論争	（３：20～30）	（11：14～23）
☆15：22　「カナン」の女性の娘の癒し	（７：24～30）	―――
★20：30・31　二人の盲人の癒し	10：46～52	18：35～43
△21：９　エルサレム入城	（11：１～11）	（19：28～38）
△21：15　神殿での癒し	―――	―――
22：42・45　ダビデの子論争	12：35～37	20：41～44

☆印：マタイ独自箇所において「ダビデの子」が癒しと関連している用例
★印：マルコに由来箇所において「ダビデの子」が癒しと関連している用例
△印：21：14により癒しと関連（後述）
（　）は並行記事のうち「ダビデの子」を含まないペリコーペ
〔　〕は称号がイエスに向けられたものではない箇所

このようにマタイは奇跡的治癒または悪霊追い出しによる癒しと「ダビデの子」称号を関連させる傾向にあることがわかる。

次に，これら10箇所の「ダビデの子」称号用例について，個別に分析を行いたい。

⑴　マタイ１：１「アブラハムの子ダビデの子，イエス・キリストの系図」

マタイ福音書は冒頭において，キリスト称号とともに「ダビデの子」称号を導入することによって，イエスが何者であるかを描き始める。

⑵　マタイ12：23「群衆は皆驚いて，『この人はダビデの子ではないだろうか』と言った。」

原マルコテキスト（３:20〜30）では，ベルゼブル論争は，家に帰ったイエスのもとにも人々が殺到する中で，人々がイエスについてうわさする「気が変になっている」という評判に基づき身内のものがイエスを取り押さえにくるといういきさつによって始まっている。

しかしマタイは「悪霊によって悪霊を追い出す」という中傷のもととなった，実際の悪霊追い出しによる癒しの出来事をもって論争のきっかけとしており，その癒しに対する人々の驚嘆の声として「この人はダビデの子ではないだろうか」という言葉を記している。人々がイエスをダビデの子と呼ぶのは，癒しの奇跡を目の当たりにしたからであり，すなわち，イエスの癒しの奇跡と「ダビデの子」称号はここでは不可分に結びついている。

⑶　マタイ15：22「主よ，ダビデの子よ，わたしを憐れんでください。」

原マルコテキストでは「シリア・フェニキアの女」とあるのをマタイは「カナンの女」とする。マルコでは地の文において女性の懇願が説明されるが，マタイは女性の台詞の形に直し，「主よ，ダビデの子よ」という呼びかけを導入している。ここでもまた「ダビデの子」称号は癒しの奇跡と結びついている。

⑷　マタイ９：27「ダビデの子よ，わたしたちを憐れんでください。」

⑸⑹　マタイ20：30・31「主よ，ダビデの子よ，わたしたちを憐れんでください。」

マタイ９：27〜31はマタイに固有の記事であるが，マルコ10：46〜52に起源を持つマタイ20：29〜34といくつかの点で共通している（二人の盲人，呼びかけの言葉，等）。しかしマタイ20：29〜34の記事のほうがマルコ10：46〜52に近い。

以下はマルコ10：46〜52≒マタイ20：29〜34と，マタイ9：27との相違点である。

・「エリコの町」という舞台設定　⇒　削除
・道端に座っている盲人（たち）とのやり取り　⇒　家の中についてきた盲人たちとのやり取り
・人々が叱りつけるという物語契機　⇒　削除
・「何をしてほしいのか」→癒しの要請というやり取り　⇒　「わたしにできると信じるのか」という信仰のモチーフへの変更
・「すぐ見えるようになり」　⇒　削除
・癒しの後の随順　⇒　沈黙命令と違反

一方で，マタイの両記事には盲人が（名前のない）二人であること，イエスが癒しにあたって彼らの目に触れること，という点がマルコを離れて共通している[3]。

この二重記事化は何のためであろうか。ルツ（1997：p85）は，マタイは11：５「目の見えない人は見え，足の不自由な人は歩き，重い皮膚病を患っている人は清くなり，耳の聞こえない人は聞こえ，死者は生き返り，貧しい人は福音を告げ知らされている」より前に盲人の癒しを語る必要があったと指摘している。マタイはマルコの盲人バルティマイの癒しの記事を11：５に先立って語られる，福音書前半の一連の奇跡的治癒記事の中に挿入すると同時に，それらの癒しの記事の中に「ダビデの子」称号を挿入するために，「二人の盲人の癒し」の記事を必要としたのではないだろうか。一方で20章の「二人の盲人の癒し」は，やはり「ダビデの子」称号によって21章のエルサレム入城と結びついているために，マタイの物語構成上必要不可欠なのである。

⑺　マタイ21：９「ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に，祝福があるように。いと高きところにホサナ。」

⑻　マタイ21：15「境内で子供たちまで叫んで，『ダビデの子にホサナ』と言うのを聞いて腹を立て，」

21章のエルサレム入城の記事は「ダビデの子」称号（21：９，15）と多数の聖書引用によってまとめあげられている[4]。１：１において導入されて以来繰り返されてきた「ダビデの子」称号によってイエスを表すマタイの企てはここにおいてクライマックスに達する。ゼカリヤ９：９の成就引用や，８節に描写される大勢の群衆や人々による歓迎はイエスの入城が王としての入城であることを印象づける[5]。そしてこの人々の歓迎を象徴的に要約するのが「ダビデの子」称号である。

「ダビデの子」称号を含むこれらの句（９，15節）は，直接には奇跡的治癒と関係していない。しかし図１において示したように，これらの句がインクルージオを形成しているとすると，それが囲む21：14の癒しの記事と，「ダビデの子」称号の関連を見ることができるのではないか。逆にいえば，21：14は，「ダビデの子」称号と治癒奇跡を結びつけるために不可欠なのである。

また，イエスが入城後，時をおかずに最初に行ったのは，神殿の権威によって認可され「正当」・「正統」にも商売を行っていた人々[6]を放逐することであったが，そこに目の見えない人たちや足の不自由な人たち（14節），さらには子ども（15節）の存在が立ち現れてくるのは[7]，イエスによる王権の行使とその結果なのである。それゆえ，このことと結びついて行われる奇跡的治癒もまた，王権の行使の一環ということになる。

それゆえ，これまでに「ダビデの子」称号とともに行われてきた奇跡的治癒もまたイエスによる王権の行使であったことが，ここに確認されるのである。ひいてはイエスが宣教において行ってきた奇跡的治癒の数々もまた，王権の行使に結び付けられるのである。

⑼　マタイ21：42「彼らが『ダビデの子です』と言うと，」

⑽　マタイ21：45「どうして彼（キリスト）がダビデの子なのか」

１：１においてキリスト称号とともに導入され，その後繰り返されてきた「ダビデの子」称号は，しかしその最後の用例において，イエス自身の言葉を通してキリスト称号によって乗り越えられる。

ここまでの結論として，再び，マタイ福音書全体における「ダビデの子」称号の用例が示す特徴についてまとめてみたい。

まず，「ダビデの子」称号はマタイにとっては悪霊追い出し・病の癒しと関連付けられている[8]。

１：１において初めて「ダビデの子」称号はキリスト称号とともに現れるが，９：27，12：23，15：22，20：30，20：31，21：９，21：15においては「ダビデの子」称号は奇跡的治癒・悪霊追い出しと結びついて言及される。

そして，イエスの宣教の途上においてなされてきたこれらの奇跡的治癒・悪霊追い出しは，イエスによる「ダビデの子」としての王権の行使であったことが，エルサレム入城において確認される。

最終的に「ダビデの子」称号は再びキリスト称号と結合され（22：42），しかし同時に，キリストはダビデを凌駕することが示される（22：45）。

４．サムエル記下５：８とマタイ21：14との関連について

幾人かの学者は，マタイ21：14における癒しが，サムエル記下５：８における禁止命令伝承「このために，目や足の不自由な者は神殿に入ってはならない，と言われるようになった」の解除を意味するという解釈をとっている。そしてこの格言はサムエル記下５：８においては，ダビデの命令に由来するとされている。すなわちマタイ21：14の癒しの記事は，イエスがダビデの権威を超えるものであることを予示する意図があるというのである。

Olyan（2011：p119-127）[9]はサムエル記下５：８が，レビ記21章のように祭司を対象としているか，申命記23：２のように礼拝者一般を対象としているかについては議論が分かれるとしながら，いずれかの時代には神殿礼拝から障がい者が排除されていた可能性を指摘している[10]。また，後代において後者の解釈がなされた例として，11QTa45:12-14，1QSa 2:3-10，1QM 7:4-5を詳細に検証し，とくに11QTa45:12-14が命ずる目の不自由な者の聖なる都からの排除にサムエル記下５：８，イザヤ書52：１，民数記５：３bの影響を指摘している[11]。

Davies & Allison（2004：p140）[12]は，当該記事は，目の不自由な者や足の不自由な者を殺し，神殿に入ることを

禁じた第一のダビデに，目の不自由な者や足の不自由な者が近寄り癒していただく第二のダビデ（＝イエス・キリスト）を対置している，としている。その際，祭儀の場から目の不自由な者や足の不自由な者が排除されていた実例として，やはりクムランテキスト（1QSa2:8-9など）を挙げている。

Hagner（1995：p601）は，21：14の癒しが行われた場所を異邦人の庭と想定する根拠として，レビ記21：18-19・サムエル記下５：８に加えて，やはり1QSa 2:5-22などのクムランテキストを挙げている。

一方で，Hare（1993：p241）は，マタイ21：14について，神殿から排除されていた者たちがイエスによって回復されるという解釈は誤りであるとし，その根拠として，目の不自由な者や足の不自由な者はイエスの到来を耳にしたときには，すでに神殿の中にいたはずである，ということや，後代のラビ文献において，目の不自由な者や足の不自由な者たちが祭りに参加する義務は免除されており，しかし参加したい場合には許可されているという記述があることを述べている。加えてHareは，現代において「宮清め」の記事がアンチ・セミティズムへと容易に結びつくという影響史的誤謬を警告する[13]。

ルツ（2004：p229）は「しばしば引き合いに出される個所のサム下５：８は格言を言い直したもの（「盲人も足の萎えた者も家の中に入るな」）で，ユダヤ教では決して神殿への参内に対する規制の根拠とはならなかった。それゆえ，ここで反立的な予型論が組み立てられるべきではなく，イエスはユダヤ教と反対にまさしく足の萎えた者たちや盲人たちに神殿に参内する道を開いたのだと要請してはならない」とし，「1QSa2, 6-8; CD15, 15-17=4QD^{b}fr17, 6-9（=Garcia M.54）は教団内の盲人や足の萎えた者の成員について語る。（中略）Chag1, 1は足の萎えた者と盲人とを神殿巡礼義務から解放しているが，彼らが旅行できないという非常に人道的な熟慮からである」（同p779）と述べている。

興味深いのは，ルツも，また排除があったとする説をとる者たちも，同様のクムランテキストをその根拠として挙げていることである。この点について，Dorman（2007：p68, p75f.）[14]はクムラン文書の関連テキスト[15]の詳細な検証に基づき，共同体の成員として障がい者の存在は前提されていること，ある状況のもとでは除外の対象となること，その状況や基準は各文書間で異なっており，常に同じ判断が共通しているわけではないこと，障がい者は何らかの点で劣ったものとみなされる一方，保護や配慮を向けられてもいること，穢れや蔑みの対象ではないことを明らかにしている。

一方で，Evans（1997：p79）[16]は，当該箇所はタルグムで「罪びと」（”The *sinners* and the *guilty* shall not go up to the house.”）と訳されていることから，また，ヨハネ９：２などのテキストから，当時，障がいと罪を結びつける慣習的前提があったということを指摘している。

さらに，Bauckham（1996：p471-488）[17]は，エピファニウスが引用しているエゼキエルのアポクリュフォン（パナリオン70：5-17）や，ラビ伝承（レビ記ラッバー４：５）の寓話において，盲人と足の不自由な者のペアが，体と心が犯す罪の比喩とされている例を報告しており，このような理解の背景にサムエル記下５：８があることを指摘している。

すなわち，障がい者への排除はなかった，あるいは「人道的な」合理性があったとする，ルツやHareの解釈はアンチ・セミティズムを克服したいという善意によって影響されていると言えるのではないか。

しかし，一方で，神殿や祭儀から彼らが実際に排除されていたという明確な証拠もない。一定の祭儀的な場から除外されていたということはクムラン文書からも推察されるが，しかしそのような扱いがエルサレム神殿でも行われていたかについては，確証がない。また，彼らが聖所への侵入を禁止されていたとしても，イエスの「宮清め」が異邦人の庭で起こったことであるとするならば，神殿における彼らの存在は不自然ではないと見ることも可能である[18]。

とはいえ，サムエル記下５：８とマタイ21：14との関連について暗示する要素がもう一つある。それは，「目の不自由な人」と「足の不自由な人」という組み合わせである。この両者のみの組み合わせは新約聖書中に他に例がない[19]。LXXでも，申命記15：21において犠牲の動物に関してこの組み合わせが見られる他には，サムエル記下５：６～８における用例のみである。

その一方で，前述のBauckhamが挙げている例からもわかるように，これらの組み合わせがサムエル記下５：６～８を前提に用いられてきた例が存在する。

これらを傍証として，マタイ21：14がサムエル記下５：６～８を意識している可能性について，一定の蓋然性を指摘することはできるのではないか。

５．結論

マタイ21：14における目の不自由な者と足の不自由な者の癒しの記事は，「ダビデの子」称号を奇跡的治癒と結びつけるというマタイの構想にとって不可欠である。それはマタイが福音書を通じて語ってきた奇跡的治癒がイエスによる「ダビデの子」としての王権の行使であることを示すためである。

「ダビデの子」称号は最終的にマタイ22：42，45においてキリスト称号によって乗り越えられるが，そのことはサムエル記下５：８に言及される禁止命令の解除という形でマタイ21：14に予示されていると見ることも可能である。

注

1　このほか，マルコ依存箇所のうち，二つの顕著な削除がある。マルコ11：16「また境内を通って物を運ぶこともお許しにならなかった」をマタイは削除。二つ目はイザヤ56：７の引用から（ルカ19：46同様に）πᾶσιν τοῖς ἔθνεσιν を削除している。

2　20：30，31の「ダビデの子」呼称は並行記事中のマルコ10：47，48からの採用。

3　この「触れる」（ἅπτω）をマタイはマルコ８：22～26におけるベトサイダでの盲人の癒しから持ち込んだのであろうか。また，マタイ９：30～31の沈黙命令は，マルコ８：26の禁止命令と関連するのであろうか。しかし，この記事はマタイのこれらの治癒記事と殆ど物語上の共通点はない。U.ルツ『マタイによる福音書（８－17章）』（EKK新約聖書註解I/2），小河陽訳，教文館，1997年，p729は，「われわれのテクストは，（中略），マコ８：22～26の省略された物語を想起させはしない。ただ20：34だけが「放置された」（マコ８：23）ὄμμα〔目〕を取り上げる。」と述べている。

4　U.ルツ『マタイによる福音書（18－25章）』（EKK新約聖書註解I/3），小河陽訳，教文館，2004年，p218。

5　D.A.Hagner, *Matthew14-28* (WBC 33B), Dallas, TX: Word, 1995, p596やルツ（前掲書：p225）は，21：10「街のすべてが騒ぎ立ち」（ἐσείσθη πᾶσα ἡ πόλις）を２：３における東方のマギたちによるイスラエルの王誕生の知らせにエルサレムのすべてが動揺した記事と結びつけている。

6　Douglas Hare, *Matthew: Interpretation: A Bible Commentary for Teaching and Preaching*, Westminster John Knox Press, 1993, p241によればこのシステムは当時，カイアファによって，オリーブ山で政敵により確立されていた同様の商売を打ち負かすために導入されたばかりであったという。

7　ルツ（2004：p218）は，マタイが商売人と両替人および「本来の権威の担い手たる祭司長たちや律法学者」と，「盲人や足の萎えた者たち」および「彼（イエス）をダビデの子と賛美する『子供たち』」を対置させていると指摘している。

8　ルツ（1997：p87）「ダビデ自身がユダヤ教において癒しと関連させられた」。このことについて，ルツは注において（同p730）ヨセフス『古代誌』6・166，168を指示。この箇所はサムエル記上16：14～23における，神からの悪霊がサウルを悩ませた際にダビデが竪琴を奏でたというエピソードに基づき，ダビデをサウルにとって随一の医者（ἰατρός）としている。

9　Saul M. Olyan, *Social inequality in the world of the text : the significance of ritual and social distinctions in the Hebrew Bible*, Vandenhoeck & Ruprecht, 2011.

10　*ibid.*, p127, “At all events, 2 Sam 5:8b suggests that a ban on worshippers with at least some physical defects was in

force in Jerusalem at some point in time.”

11　*ibid.*, p129-140, ’The Exegetical Dimensions of Restrictions on the Blind and the Lame in Texts from Qumran’

12　W.D.Davies & Dale C. Allison, *A Critical and Exegetical Commentary on the Gospel According to Saint Matthew* (ICC Vol. 1), Edingburgh, T&T Clark, 1997/2004.

13　“The narrative of Jesus’ action in the temple lends itself all too easily to modern expressions of anti-Judaism and anti-Semitism. Christians must resist this misuse of the passage.”

14　Johanna Helena Wilhelmina Dorman, *The Blemished Body: Deformity and Disability in the Qumran Scrolls*, University Library Groningen, 2007.

15　1QSa1:25-2:11, CD15:15-17, 1QM7:3b-8, 4QMMT B 49-54, 11QTa 45:12-14など。

16　Craig A. Evans, *A Note on Targum 2 Samuel 5.8 and Jesus’ Ministry to the ‘Maimed, Halt, and Blind’*, Journal for the Study of Pseudepigrapha, 1997.

17　Richard Bauckham, *The Parable of the Royal Wedding Feast (Matthew 22:1-14) and the Parable of the Lame Man and the Blind Man (Apocryphon of Ezekiel)*, JBL(115:3), 1996.

18　そのような解釈の例として，Clinton E. Arnold & Grant R. Osborne, *Matthew: Exegetical Commentary on the New Testament*, Zondervan, 2010, p140, “So here they come into the Court of the Gentiles, paralleling the crippled beggars at the temple gates in Acts 3:2.”，および前述のHagner (1995:p601)。

19　他はみな，これら以外の障がいや，貧しい人，病人などとの組み合わせで用いられている。

※本研究は2013年６月に行われた，関西新約聖書学会 第54回学術研究発表会における発表に基づいている。